

よくわかる血液内科

萩原将太郎(著)

獨協医大総合診療科/総合診療科教育センター診療部長・センター長

志水太郎

「優しく」学べる血液内科

本書は私自身、拝読してファンになっただけでなく、後期研修医、また若手スタッフの先生にもとてもお薦めの血液内科の本です。

なぜファンになったかですが、まず第一に、“症例が豊富”であることです。各章のトップが症例で始まっていることから、症例ベースが好きな若手医師の関心を引き出してください。

第二に良いなと思うのは、本書の持つ優しさ、というか“読者フレンドリー”であること。萩原将太郎先生がまるで横に付いてくださっているかのよう、優しい語り口の導きで、ケースごとの血液内科の専門家の考え方をなぞることができることも特徴です。そしてその優しさの故、これまでみたことがないくらい明快、かつクリアカットに、時にシグナルレベルまでの各現象を説明してくださっていること。各症例には診断のポイント、治療のポイント、と明文化がされていて、血液内科を学ぶモチベーションを後押ししてくれると思います。

優しさと言えばその他に、各章が長すぎないことも特徴です。本書は各血球の異常、血栓症、感染症、輸血、危険な病気……と網羅的な章の展開でありながら、270ページほどのページで章立てが30以上もあり、血液内科を専攻しない若手医師にも、時間のある時に気になるところでさっと読むという読み方もできます(通読がお薦めです)。血液内科というと難しそう、と身構えてしまう気持ちは多くの方に(自分も含め)あると思いますが、そのような不安をこの本は優しく拭い、広く血液内科への門戸を広げてくれる、そんな雰囲気もこの本から感じることができます。

第三に、“萩原先生のロールモデルとしての情熱が伝わってくる”ということ。先述の優しく語

りかけてくれる上級医の口調ということとともに、勉強になる臨床的思考方に満ちた“コラム”や“クリニカルパール”も素晴らしいと感じます。

第四に本書で気に入っているのは末梢血スミアの豊富さです。現在まで多くの研修医の先生方と接する中、彼らに末梢血のスミアを見る習慣がありませんという印象を持ちますが、もったいないと感じます。これは自分の恩師のティアニー先生(カリフォルニア大学サンフランシスコ校教授)もおっしゃっていたことで、日米に共通した話題かもしれません。グラム染色と同様に、末梢血も情報に満ち、また医学の奥深さ、生命の神秘さを教えてくれます。現場でビタミンB12欠乏症を疑って好中球核過分葉を見つけたとき、溶血性貧血を疑って破碎赤血球を見つけたとき、マラリアを疑って輪状体を見つけたときの興奮と言ったら!本書の第10章ではそのような要望に応じてくれるように、豊富な代表的末梢血スミアの異常所見の写真があり、コメントも非常に勉強になります。

まだまだこの本の魅力はたくさんありますが、まさにタイトル通りの『“よくわかる”、そして“優しい”血液内科』をぜひ書店などでお手になさり、血液内科の魅力にはまってみませんか。新春に素晴らしい勉強の機会を与えてくださった萩原先生に心より感謝申し上げます。



● A5/頁284/2018年
定価:本体3,800円+税
[ISBN978-4-260-03207-0]
医学書院 刊